

学位論文題名

自然環境と社会の相互関係の複数性

－ かかわりの持続性に関する環境社会学的研究 －

学位論文内容の要旨

本論文は、日本国内の2つの地域の事例研究に基づき、社会と自然環境とが相互に変化していくプロセスと、そこから導き出される両者の関係の持続性について、アクターや認識および価値の「複数性」（質的に異なったものが存在することであり、その差異をどのようにとらえるかについての概念）に注目しながら分析したものである。

本論文は、第1章で研究の目的・背景と研究史が議論され、第2章で当該問題をめぐって先行研究の批判的検討をもとに理論的考察がなされた上で、第3～6章で事例研究が行われ、最後に第7章で総合的な考察を行い、第8章で結論が述べられる、という構成になっている。

第1章では、本論文の目的を、社会と自然環境とが相互に変化していくプロセスについての社会学的研究と規定した上で、対象となる「身近な自然」について、その性質と問題の焦点が議論される。その上で、本論文の視角となる環境社会学について概観され、中でも地域住民の経験論に拠って立つ鳥越皓之らの生活環境主義について批判的に検討が加えられる。

続く第2章では、まず、本論文の問題関心が、二次的自然をめぐるさまざまな働きかけにおける多様性のありようにあることが述べられ、そこにおける課題の抽出が行われる。すなわち、課題は「誰がどんな価値や認識を根拠にしてどんな自然を守ろうとしているのか」ということについて多様なあり方が並存している（場合によっては対立している）点であることが提示され、そのことをまず理論的にどう扱うことが可能かが検討される。そこで提示されるのがハンナ・アレントの「複数性」概念であり、多様性を複数性と読み替え、二次的自然をめぐるせめぎあいから生まれうる社会関係の可能性が理論的に検討される。

第3～6章は、以上を踏まえての事例研究であり、そのうち第3～4章は宮城県北上川河口地域、第5～6章は札幌市西野地区を対象としている。

第3章では、宮城県石巻市旧北上町の北上川河口エリアに広がるヨシ原を対象に、それがどのように地域社会と関係を結んできたかが、詳細なフィールドワークにもとづき、検討される。北上川河口地域のヨシ原は、1911～1934年の大規模な河川改修の結果登場した新しい自然であったが、当初からその利用・管理の権限をもったのは各集落の自治組織である「契約講」であった。実のところ河川改修以降このヨシ原の場所は河川区域として政府の所有・管理の範囲内なのだが、現在に至るまでこの「契約講」の権利が実質的に認められている。ヨシ利用をめぐる許可・調整のしくみは、ヨシ利用の集団的な権利を国側がかなりの程度尊重することによって成り立っている。その意味では、ヨシ原をめぐる権利はたいへん「堅固」なしくみをもっていると言える。しかし一方、このヨシ原を住民たちが厳密に管理してきたという実態は

必ずしも浮かび上がってこない。一貫してゆるやかな運用のもとで、そのときどきに応じた柔軟な利用のしくみを作ってきた歴史がある。つまり、「堅固」なしくみの一方で、「柔軟な」しくみが並存しているということが議論され、そして、その背景には、河川という空間の不安定さがあると議論される。

第4章では、第3章に引き続き北上川河口エリアのヨシ原、さらには、同地域の他の自然資源が取り上げられ、今度は、人びとの生活にとってヨシ原を初めとする自然資源がどういう意味を持ってきたかが検討される。契約講によって、自然資源の個人的な利用はさまざまな規制がかけられてきた。しかしその一方で、地域の集団的な利用が保証され、人びとは時代状況に合わせて資源利用を組み合わせることによって生活を組み立ててきた。そのような自然資源（ヨシ、川魚、雑木、栗など）について、まず、その半栽培性が議論される。すなわち、人びとが利用している自然の多くは、まったくの野生でもなく、また栽培植物でもない「半栽培」のものであり、そして、大事なことはそうした半栽培資源が、それぞれにローカル・ルールを有している点である。そして、そうした半栽培資源を時代に応じてさまざまに利用してきたさまが、複数の個人の生活史から明らかにされる。人びとは、安定しない水田耕作を生業の基軸にしながら、そうした自然との半栽培的なかわりを複数組み合わせること（生業複合）によって、地域での「在りリスク回避」を実現してきたことが議論される。

第5章では、札幌市西野地区の都市近郊林が対象として取り上げられ、そこで活動している市民団体がその活動の方向性や存在意義を変化させていくプロセスから、自然と地域社会との関係について考察が加えられる。札幌市西野地区では、母親たちを中心にした森林利用・管理の市民グループが1998年に立ち上がり活動を続けているが、申請者はそこで長年参与観察を続けている。このグループは、一見、森林にかかわる典型的なボランティア・グループと見なされうるが、その内実をよく見ると、そういうくくりでは把握しきれない側面を有している。グループの活動が続く中で、（1）行政との協働をめぐるグループ内部での葛藤、（2）グループの方向性をめぐる内側からの違和感の表出、（3）活動を地域全体に広げようとするさいに直面した旧住民層の環境認識とのズレ、といったものが生まれ、それによってグループのメンバーは動揺をする。しかしその動揺は、このグループが森林をめぐる「答」を他のアクターと共有できないというネガティブなことがらであるよりむしろ、「問い」を共有しようとし、そのことによって多様なかわりを維持・発展させる可能性を示していることが明らかにされる。

第6章では、同じ札幌市西野地区であるが、今度は同地区の小河川における住民参加による河川改修事業が、やはり参与観察による事例研究として取り上げられる。この住民参加事業が、事業をめぐる参加者の認識のズレ、地元町内会との軋轢など、「不都合」に満ちていたことが指摘される。住民参加によって用意された場をめぐるその位置づけや役割についても混乱が生じ、内部の議論は錯綜していった。そしてそうした「不都合」を内包しつつ、最後には「西野川ワークショップ区間の維持方針」が打ち出された。このプロセスはすべてがきれいに合意されたというプロセスではなく、「不都合」であることを合意するという含んだプロセスだった。さらに最後に出された「維持方針」は、そうした「不都合」をはらみつつ、維持方針自体の内容更新の可能性と、参加の継続性や正当性（レジティマシー）を担保するというたぐいの合意形成であったと分析される。

以上のような事例研究を踏まえ、第7章では、総合考察が行われる。すなわち、二次的自然と地域社会をめぐる相互関係の多様性の分析から、その相互作用が持続していくという社会的な持続性が見いだされ、さらに、多様性を複数性に読み替えることで、二次的自然をめぐる公共空間における活動や参加の社会的な持続性が浮かび上がってくることが指摘される。さらに、複数性を踏まえた二次的自然のあり方と

は「科学的な唯一の解」にもとづくのではなく、「自然の複数解」にもとづく社会的な文脈から導き出されることが指摘される。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 内 泰 介

副 査 准教授 祖 田 亮 次

副 査 准教授 藏 田 伸 雄

学 位 論 文 題 名

自然環境と社会の相互関係の複数性

－ かかわりの持続性に関する環境社会学的研究 －

本論文は、日本国内の2つの地域の事例研究に基づき、社会と自然環境とが相互に変化していくプロセスと、そこから導き出される両者の関係の持続性について、アクターや認識および価値の「複数性」（質的に異なったものが存在することであり、その差異をどのようにとらえるかについての概念）に注目しながら分析したものである。

日本における自然環境の多くはいわゆる二次的自然であり、人間と自然との相互作用の蓄積でもある。したがって、自然の問題はきわめて社会的な問題である。そして今日、自然環境をめぐる問題の焦点は、自然をめぐるさまざまな活動や、認識、そこに付与されている意味や価値がたいへん多様になっていることとであり、その多様性をどう扱えばよいのかという点にある。本論文は、この点を、事例研究に基づきながら、理論的に解明しようというものである。

本論文の成果として、以下の3点をあげることができる。

第一に、環境にかかわる多様な価値や態度をどう扱うか、というきわめて現代的な課題について、詳細なフィールドワークに基づいて、多角的に論じた点である。規範としての「自然保護」「環境保全」が実際の地域社会のリアリティとずれていることはかねて環境社会学分野を中心に議論されていたが、多くは、そのずれを指摘するにとどまり、また、地域それぞれの環境保全がある、という議論にとどまるが多かった。本論文はその点について、参与観察を含む詳細な調査から理論的な貢献を行うことに成功しており、今後当該研究領域において参照されるであろう。

第二に、社会と環境をめぐる多様性を「複数性」と読み替えるという議論や、社会と環境との間のかかわりの持続性（社会的持続性）の議論は、これまで環境政策や環境社会学において十分に議論されてこなかった点であり、この点を本論文は事例に基づいて論じることに成功している。その点、今後学問的にも参照されると同時に、広義の環境政策において実践的にも意味をもってくるだろう。

第三に、取り上げられた2つの事例は、自然環境と地域社会にかかわる詳細なモノグラフとしての価値を有しており、今後環境諸科学についてのさまざまな議論に基礎的データを与えるだろう。

本論文は、日本国内の2つの地域の事例研究に基づき、社会と自然環境とが、相互に変化していくプロセスとその関係の持続性について、アクターや認識・価値の「複数性」に注目しながら分析したものであ

る。その成果は、上述したように、当該研究領域にいくつかの新しい視点をもたらすことに成功している。しかし、「多様性を複数性に読み替えかえる」、「社会的持続性」といった本論文の中核的な議論に若干の詰め甘さを残すなど、いくつかの問題点が指摘されうる。しかしこれらの問題は今後の研究により乗り越えられるものと推察される。本研究の成果の一部はすでに査読付き学会誌などに複数掲載されており、また、編著書への分担執筆として書かれたものも含んでおり、学界でも一定の評価を得ている。

以上のことを総合的に評価し、本委員会は、本論文の著者黒田暁氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。